

会議名：株式会社広域高速ネット二九六

2025年度 佐倉市・四街道市 放送番組審議会

日時： 2026年2月5日（木）11:00-13:30

場所： 広域高速ネット二九六 通信技術センター会議室

出席者： 番組審議委員および弊社役員・社員 12名

■出席委員

岩淵 明弘 委員	佐倉商工会議所 会頭
圓城寺 一雄 委員	佐倉市教育委員会 教育長
小川 勝寛 委員	佐倉市観光協会 会長
小澤 芳雄 委員	千葉県視覚障害者福祉協会 理事
毛見 文枝 委員	NPO 法人ちば市民活動 市民事業サポートクラブ
府川 雅司 委員	四街道市教育委員会 教育長
米家 靖子 委員	四街道市国際交流協会 顧問

■株式会社広域高速ネット二九六 出席者

藤本 光弘	代表取締役社長
伊藤 完	常務取締役
西村 一郎	管理本部副本部長
藤本 健太郎	企画制作本部放送制作部 部長
萩谷 智弘	企画制作本部放送制作部 グループ長補佐
〈事務局〉平川 裕	企画制作本部放送制作部 グループ長補佐

番組視聴

■今年度制作・放送した番組

1. ふるさと発！ドキュメント 地域の無限大
「朝鮮人からの手紙 ～関東大震災 救援の記録～」(30分番組)
2. 壮観劇場「東京湾アクアライン」(30分番組)
3. 戦後80年特別番組
「ドカンに震えたまち～九十九里と米軍基地の10年～」(30分番組)

番組審議

■<岩渕 明弘 委員>

「東京湾アクアライン」は、ドローン撮影における技術力の高さや、多くの許可が必要である点など、制作の大変さに関心しました。トンネル建設の技術の進歩やメンテナンスに携わる多くのプロの存在を強く感じました。

「朝鮮人からの手紙」は、関東大震災に関する歴史について改めて考えさせられました。今はYouTubeやWEBニュースなど様々な媒体がある中で、正しい情報や真実を見極めることが重要であり、メディアの果たす役割は重要であると感じました。

「ドカンに震えたまち」は、自分の身近な話とも重なる部分がありましたが、九十九里に基地があったことは知りませんでした。このような歴史を後世に伝えていくこともメディアの役割だと思いました。

■<圓城寺 一雄 委員>

「朝鮮人からの手紙」は、子どもたちの歴史教材として活用できる番組だと感じました。歴史的事実を知ることに加え、SNSの時代において情報をどう見極めるかという点でも重要な内容だったと思います。

「東京湾アクアライン」はドローンによる映像が印象的で、建設や維持管理の難しさについて理解が深まりました。構想から30年かかったという点も初めて知り、行政の大変さを感じました。

「ドカンに震えたまち」について、地元にもこのような平和教育の題材があるということを改めて認識しました。

■<小川 勝寛 委員>

社会が大きく変化している中で、過去を振り返りながら新しい時代に進む必要性を感じました。296の番組は「温故知新」という視点で、過去を知り、これからを考えるきっかけになっていると思います。

地域に密着した情報は、商業や観光の面から見ても重要であり、こうした情報発信の役割は今後さらに大きくなるのではないかと感じました。より分かりやすく、地域に寄り添った形で発信していくことで、さらに身近な存在になるのではないかと感じます。

■<小澤 芳雄 委員>

平和活動に関わる立場として、今回視聴した「朝鮮人からの手紙」や「ドカンに震えたまち」、また昨年放送された「継ぐ記憶 戦争なき未来へ」など、戦争と平和に関する番組については大変意義があると感じています。戦争体験を次世代へ伝えていく中で、296による継続的な取材・放送に感謝しています。

また、296で放送しているニュースや企画番組は全体的に良い内容のものが多く、日頃から「壮観劇場」や「麵娘」なども楽しみに視聴しています。放送をきっかけに実際に足を運ぶこともあり、地域の魅力発信にもつながっていると感じています。

■<毛見 文枝 委員>

番組が刷新されると伺い、とても楽しみにしています。より楽しい番組になることを期待しています。

「朝鮮人からの手紙」は、デマだけでなく助けられた事実についても知ることができ、考えさせられました。現代にも通じる内容だと思います。

「東京湾アクアライン」は迫力があり、保守点検の大変さなど裏側を知ることができました。ドローンの映像も印象的でした。

「ドカンに震えたまち」についても、地域の知らない歴史を知ることができる良い番組だと感じました。今後も丁寧な取材と制作を続けていただければと思います。

■<府川 雅司 委員>

今回視聴した番組について、番組を作るうえで最も重要なのは取材力ではないかと感じました。今回の3本はいずれもよくできていたと思います。

「朝鮮人からの手紙」は、資料の見せ方や解説が分かりやすく、印象に残りました。

「東京湾アクアライン」については、また行ってみたいと思わせる番組でした。ドローンを使った映像では、支える人たちの苦勞が感じられ、いわゆる縁の下の力持ちの方々がさまざまな苦勞をしながら支えていることがよく伝わっていたと思います。

「ドカンに震えたまち」は、3名の女性の語りに説得力があり、番組の軸となっていたと思います。

今回視聴した番組はいずれも、取材力とシナリオづくりの大変さが感じられました。番組制作には多くの時間と努力が必要であることが伝わってきました。

歴史や思いをつないでいくことの大切さを感じるとともに、制作に携わった皆さんの努力は高く評価できると思います。

■<米家 靖子 委員>

3つの番組を通して、問題点の捉え方や、その伝え方がよく考えられていると感じました。素材のつなぎ方や構成なども丁寧に作られていると思いました。

296の番組は地域に根ざし、実際に見たことや取材したことを大切にしているため、信頼できる内容だと感じています。

「ドカンに震えたまち」は、別の形、例えばドラマなどでも発信できる可能性があるのではないかと思います。若い世代に届ける工夫も必要ではないかと思います。

「朝鮮人からの手紙」については、番組の導入部分で背景が分かる説明があると、より理解しやすくなるのではないかと感じました。

以上